鳥取県北栄町

太陽光の恵みで電力も緑化植物も

エナテクスファーム「低炭素杯2019」オルタナ最優秀ストーリー賞

第9回「低炭素杯」2019の「オルタナ最優秀ストーリー賞」には、エナテクスファーム（鳥取県北栄町、磯江公博社長）が選ばれた。自然エネルギー先進県である鳥取の日本海沿岸部で、太陽光発電と農業を同時に行う「ソーラーシェアリング」を立ち上げ、発電と都市緑化の一石二鳥を狙う。

（オルタナ編集長・森摂）

エナテクスファームの磯江公博社長（鳥取県北栄町の「北栄ソーラーファーム」で）

エナテクスファームがある北栄町は、県東端の鳥取市と西端の米子市のほぼ中間、倉吉市の北側の日本海沿いに位置する。漫画『名探偵コナン』で有名な漫画家・青山剛昌氏の出身地としても知られる。

「砂丘で町おこし」が原点

北栄町の人口は14400人（2018年現在）。沿岸部の北条砂丘は鳥取市の鳥取砂丘よりは小さいものの、一帯は山陰地方に特有の砂地が広がる。その地に2016年3月、エナテクスファームが「太陽光発電」と「農業」を共有する施設「北栄ソーラーファーム」が完成した。

通常、太陽光発電と農業を同時に行う「ソーラーシェアリング」は野菜の栽培が多いが、この施設では「常緑キリンソウ」を栽培する。可食部分は無く、都市部でのビル屋上・壁面緑化や道路の法面（のりめん）緑化などに使われる。一部では原木しいたけの栽培も行う。

「北栄ソーラーファーム」ができたきっかけは、エナテクスグループの中核企業エナテクス（倉吉市）の福井利明社長の発案だという。「日本海からの風が強く、気候が厳しいこの北条砂丘で何とか町おこしをしたい」という思いがあった。

まず2000年ごろ、出力1500キロワットの風力発電機9基の計画策定に参画した。その後、2011年に再生可能エネルギー推進法が成立。翌2012年にFIT（固定価格買取制度）が始まったこともあり、同社グループは北栄町に次々と大型ソーラー発電施設をつくった。

北栄ソーラーファームで栽培する常緑キリンソウ

北栄ソーラーファームの全景（鳥取県北栄町）

「常緑キリンソウ」を栽培

そんななか、後継者問題で悩む農業者からも相談があった。もともとこの土地は風が強く、砂地のため、すぐ水が抜ける。昔から水運びに苦労し、「嫁殺し」という言葉もあったほどだ。

そこで、「ソーラーパネルと農業を組み合わせられないか」と検討が始まった。この地は「芝生」が特産品だったが、栽培には手間が掛かる。ジャガイモやタマネギ作りも研究したが、既存の農家と競合する懸念があった。

こうして「常緑キリンソウ」を育てることになった。葉が厚い多年草で、乾燥や強風にも強い。「北栄ソーラーファーム」は、エナテクスグループにとって3つ目の大型太陽光発電施設として稼働を始めた。

環境活動で社員も自信

エナテクスファームの磯江社長は「将来的に地球をどうするか、地球人としてどう生きていくかが問題であり、企業の存続が目的ではない。社会的使命を果たしたなら解散してもよい」と言い切る。こうした環境事業を通じて、同グループの社員も自信を持ったという。

キリンソウは常緑キリンソウ普及協会を通じてゼネコンや建設会社に販売する。年商は400万円規模になった。

将来的には、障がい者を雇用する「農福（農業×福祉）連携」も手掛けたいという。同ファームには、地域の「エコフューチャーとっとり」が子ども向けの自然エネ施設ツアーも実施し始めた。

厳しい自然環境と向き合ってきた鳥取では、遠山正瑛・鳥取大学名誉教授（1906―2004年）が有名な存在だ。1970年代から中国・内モンゴル自治区のクブチ砂漠でボランティアたちとポプラなどの植樹活動を行い、2万ヘクタールの緑化に成功した。その功で中国政府は1996年、生前に銅像を建てた。毛沢東を除くと唯一の事例だった。

同時に、鳥取県は自然エネルギーの先進県だ。同県では2017年度末に、再生可能エネルギーの発電量で民間の全消費電力を賄えるようになったという。「北栄ソーラーファーム」は農業問題とエネルギー問題を同時に解決する仕組みとして、全国が注目してよい存在だろう。

▼松本昭夫・北栄町長

鳥取県北栄町が低炭素杯の前身である「ストップ温暖化『一村一品』大作戦全国大会2010」で風力発電によるまちづくりで最優秀賞を受賞してから9年が経ちました。

自然エネルギーを活用した新しい農業を目指す「北栄ソーラーファーム」の取り組みがオルタナ最優秀ストーリー賞を受賞されたことを大変嬉しく思います。

今後とも、小さな町から地域の資源である自然エネルギーを生かした取り組みを、共に進めていただきたいと願っています。

小さな町から協働を

▼松本澄之・鳥取県 生活環境部 環境立県推進課次世代エネルギー推進室長

鳥取県では、魅力ある豊かな自然環境を保全する活動を進めるとともに、風力、太陽光、バイオマスなどの再生可能エネルギーの活用に積極的に取り組んでいます。2017度末には、再生可能エネルギーによる発電量で家庭や事業所で消費する電力を賄えるまでになりました。

こうした状況は、再生可能エネルギーの活用を進める県内の民間事業者の取り組みによるところが大きいと考えます。今回、「オルタナ最優秀ストーリー賞」を受賞されたエナテクスファームは、新産業の創出に取り組んでおられ、その活動の独自性や発展性を評価され、2018年度のとっとり環境杯の大賞も受賞されました。今後とも再生可能エネルギー活用のリーディングカンパニーとして発展されることを期待します。

再エネの先鋒として期待

◆この記事は、第9回「低炭素杯2019」（同年2月開催）における「オルタナ最優秀ストーリー賞」の副賞として掲載しました。2020年2月に開催予定の第10回「低炭素杯2020」においても同様に「オルタナ最優秀ストーリー賞」を選定し、副賞としてオルタナ本誌での記事報告2ページを掲載する予定です